

明石川と共に～私たちは明石川と共に生きる～

小田隆司、石原煌大、西岡龍之介（玉一アクアリウム）

ぼくたち玉一アクアリウムは、ずっと「明石川と共に」というテーマを目標にこれを目指して、そう思いながら日々調査に励んできました。

しかし去年は、新型コロナウイルス感染症で学校が臨時休校になり、緊急事態宣言が発令されて外出自粛になり、玉一アクアリウムでも初めて明石川で活動できない日々が続きました。

そして、やっと緊急事態宣言が解除され、5月23日から明石川で活動を再開しましたが、捕れるのがいつものオイカワの幼魚ではなく、ほとんどがコイやゲンゴロウブナの幼魚だったので、とてもおどろきました。

いつもの年は浅い茂みに集団で卵を産みに来るのをみんなでタモ網で追い込んで捕っていたので卵を十分に産めなかったのが、去年の春はぼくたちが活動できなかったのも、自由に産卵したためだと思いました。

最初の5月23日には130匹も捕れていたコイやゲンゴロウブナの幼魚は駆除を続けると次第に捕れなくなり、それと同時にオイカワの幼魚の数が急増して、いつもの状態に戻りました。

明石川に在来種が戻ってきて安心しましたが、ぼくたちが数ヶ月間、川に行けなただけで、こんな状態になると知って、まだまだ気が抜けないと思いました。

7月のある日、明石川支流の櫛谷川に行くと、水が濁りオイカワの群れも見えず調査をすると、ウシガエルのオタマジャクシが大量発生していて、タモ網のひとすくいでも必ず1匹は捕れる程で、1匹捕れて後ろを向くと更にウシガエルのオタマジャクシがいっぱいいる状況でした。

この日は157匹のウシガエルのオタマジャクシの駆除をして、その後も調査を続けた結果、オタマジャクシはいなくなり水も透明になって、オイカワの群れも戻ってきてくれました。

ここでも早く気がついて行動できてよかったです。

また「水路にきれいな見慣れない魚がいる」という情報をアクアリウムにもらって調査をすると「きれいな魚」とはグッピーだとわかりました。

調査を始めた10月には180匹捕れ、11月には330匹も捕れました。

調査を始めた時は、ミナミメダカはほとんどいませんでしたが、グッピーを330匹駆除した後でミナミメダカが300匹以上いることを確認して、ここでも早く気がついて環境を元に戻せば、在来種の生き物が戻ってくることがわかりました。

この水路は、用水路に流れて住宅街の地下水路を通過して田中川に流れ、明石川に合流します。

地下水路は住宅街を浸水や冠水から守るもので立入禁止で調査はできないけど、12月でも地下水路の入口の水温は18度あって、逃げ込んだグッピーは多分冬を越していると思います。

水路で調査をしている時に、グッピーを放流しているという人とお話をすることができました。

その人は水路のすぐ前の家の男の人で、家の水槽でグッピーを飼っていて、たくさん増えたので「きれいだからいいだろう」と思って水路に逃がしたそうです。

ぼくたちが「グッピーは確かにきれいだけど、日本に昔からいるメダカが食べている物を食べてしまったり、増えてメダカのすみかをうばってしまうので逃がすのはやめて欲しい」「ぼくたちは日本のメダ

カを守るためにグッピーを駆除しています」と言うと、その人はわかってきて「これからは逃がさない」と言ってくれたので、すごくうれしかったです。

調査を続け生き物の生きていける自然や命の尊さを学ぶことは、明石川を守り共に生きていく上でとても大切なことです。これからも明石川からたくさんのことを学び明石川と共にさらに成長していきたいです。

この1年間は、新型コロナウイルス感染症で大変でした。

しかし、ぼくたちには明石川があったので乗り越えられました。

くじけそうになって弱りかけた心も明石川が元気にしてくれました。

今この時も医療従事者の方々は戦ってくださっています。

日本は今、困難な時にあります。

差別や批判、争うことは悲しいことです。

今ひとりひとりができることを考えます。

ぼくたちのできることは、とても小さなことだけど、みんなと力を合わせて外来種の駆除も新型コロナウイルス感染症も乗り越えていきたいと思います。